
君と私の秘密。

エンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の秘密。

【Zコード】

N4574W

【作者名】

エンナ

【あらすじ】

私、野田 茜は地味、暗いなどと嫌われ者。それでいい。 . . .

目立つことが嫌いな私はメイクまでして地味な自分を作った
だけどそれが一番バレちゃいけないあいつにバレて . . . ! ?

バレちゃいました

「ええーっと・・・・野田さん?」

彼は驚きを隠せずすっピンの私を見ていた。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

私、野田茜あかねは一応普通の高校生。ただし、ある部分を除いて。
目立つのが昔から嫌いで、苦手でいろんなものを避けてきた。
そう、今まで。

中学校に入った時、メイクを覚え髪を伸ばし目立たぬような大人しくて暗くて静かな子を演じてきた。勉強はできるけど、体育がダメ。体が悪くて・・・・と嫌われ、いじめられる子を作ってきた。
大事なことなのでもう一回言うけど・・・・
そう・・・・今まで。つい、今まで。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

私と彼・三矢みつや祐介ゆうすけは暫く見つめ合っていた。

「祐介え? どした? なんかいたの?」

彼の友人が声をかけるまで、だ。

私は彼にジエスチャーで『教えないで』と伝え“あの彼”も理解してくれたようで友人にこういった。
「俺用事思い出したし、先帰つてて
ナイスナイス。」

友人が帰つたところで私は改めて彼に言った。

「お願い！誰にも言わないで」

「…………わ、分かつてる」

しばらく沈黙が続く。沈黙の間、彼の説明でもしよう。
顔はなかなかのイケメン……いや、十分もつてのイケメン。
だけど、皆彼を「残メン」と呼ぶ。勿論訳があり……。
彼は運動神経抜群、友達もたくさん！恵まれた容姿……。
だが。

頭がものすごく悪いのだ。

この間のテスト、5教科500点満点のテストがなんと合計70点。
結構簡単な範囲だったんだけどな……。

「あの、野田さん！」

「え？あ、何？」

「今の顔つて…………マイク？」

指さすな。やつぱりギャップひどいのかなー。

自慢じやないけど、この顔で街中歩くとスカウトが必ずかかる顔。
モデルとかのね。

「ううん。これが素。いつものがマイクだよ」

「…………ツ」

三矢君は口元を抑えた。それほど衝撃スゴイかな……。

「ね、えと…………裏門から出よう！バレなきゃ大丈夫！」
「…………うん」

彼はため息みたいな返事をした。ごめんな、被害者だね……。

約束と残メン君

「」は近所の喫茶店。

例の残メン君といれからの打ち合わせを行いまーす。

「…………」めん、お」「てもりつて

さすが残メン。

ゲーム買って無一文とは笑わせてくれるわね……。おかげで今
月ピンチじゃない……あ、なんでもない。

「ううん、いいの。それよりさつきの話だけど」

「…………バラしちゃ……ダメなんだよね。じゃあれ」

何…………？交換条件…………！？

と私はハラハラしつつ「何？」と恐る恐る聞く聲を出した。

「勉強教えてよ」

残メ———ン！！

私のハラハラ返せ！ びっくりしたあ……。つて別に変な妄想
なんかしてないから！

「そ、それだけ？」

「うんっ」

つく・・・・・。小学生みたいに無邪気に笑いやがって……。
ばかあ……。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

作戦会議終了。

喫茶店を後にした私は学校の知り合いで会わぬよつてひやうと帰りましたとさ。

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

翌日。

無論私はいつも変身メイクをして登校。

「おはよー野田さん」

・・・・・・・。

何で話しかけてくるのよー！…！…！

何でも言えないし、呼び出すことも今のカツコじや不可能なので思いつきり睨むと彼は思い出したらしく「あ・・・」と言っていた。だからと言って周りの視線はもう払えない。

もうー！バカバカ！残メンツ

私は思い切りトイレヘダッシュした。

「三矢君ツツツ！」

マイクを落とした私は早速怒りに行つた。

誰もあるの私だと氣付いていない。

「昨日の約束忘れたの！？」

「・・・・・すいません」

「今度やつたら昨日の君が言つたこともナシだからね？」

「・・・・・『めんなさああい』

うぐつ・・・・・

そんな声出すな！ 私が悪いみたいじゃない！ いいえ！ 悪くないわ！

「なあ、祐介、その人誰？」

「・・・・・えつ、ひ、秘密だま・・・・・。自分で聞けばいいじゃねーか

「そーするわ。ねー、君・・・・つていなー！」
といつとこりでチキンな私は逃げたとさ

やばいのとためらひ

「・・・・・・・・は・・・・・・・・」

ただいま私たち・・・とつてもやばい状態なのです・・・・・。

同じクラスでしかも三矢君に恋心を抱いている彼女たちに出くわしたんですね。

しかも場面が場面　！！

○○○○○○○○

回想しよう。なんでこうなったのか。

いつも通り登校して、いつも通り授業を受けて・・・・・
そう、時間は放課後だったのです。

誰もいない校舎裏で私は彼の前でマイクを落としていた・・・・・。
それがダメだつたの！トイレに入つてすればよかつた！！

偶然、そう、ほんとーに偶然！

彼女たちが現れたのでした・・・・・。

超短い回想終わり。

○○○○○○○○

「・・・・・・・・は・・・・・・・・」

かしゃん、と化粧道具を落とす私

割れた？関係ないわ・・・・・

今の状況で考えてられない。

そり、バレた！！！

しかもメイクは半分落ちていて。

確実に私だと断定できた。 しかも男子じゃない。女子だ。噂なんて風の「」とく広まるだろ？

「…………う…………あ…………」
「ううじょっ。ううじょっ。ううじょっ。」

そんな目線を彼におく「…………う…………」

例の彼…………三矢君は呪いにでもかけられたように硬直していた。使えねえ。

あ、じゃなかつた。

「…………ぐ…………」

逃げ場は、ない。

「ええーっと」

女子陣の一人が口を開いた。

私は過剰にびくついてしまつ。

「…………あんた…………いや…………あなた誰ですか？」

やつた——————！？ 気づいてない！？

「ばつかねーーーうちのクラスの野田さんじゃーん」

やつだ——————！？ ばれてんじゃん！

「ええー？ まじい？ それ素顔？ つぶつはー！ マジうかるんだけどー」

えー、なにそれ、マジ日本語じゃないんだけどー。

なんて突つ込まない。私は突つ込まない。

「でえ？ 一人で何してた系？ 付き合つてる感じイ？」

私は「違つよ」とゆるく否定する。

「そおかあ、じゃあ、彼、借りてつていーーー？ ちよつとお、用事あるんだよねえー」

ああ、せこせいお好きにスーべーだ。

「・・・・・いじよ」

・・・・・あれ? なんで私躊躇ためらつたの?

いつもふたりで勉強をする喫茶店で私は空だけ眺めぼーっとしていた。

これでもう何分経つたかな。

「お客様? 「コーヒーのおかわりはどうですか?」

「え・・・・・。あ、結構です。」

「分かりました」

そのバイトさんらしき人はニッコリと微笑んで次のテーブルへ回った。

空が青いな・・・。今彼、何してるのかな。きっと告白でもされて付き合ってるんだろうな。

だってさつきの子私より可愛いし。ううん。私なんて大人っぽいだけで可愛くなんかないもんね。

あーあ、自己嫌悪。ネガティブすぎると、私

と今日で何回目かわからないぐらいのため息。

カラーンゴロン、とドアがあぐ。
この音も何回目だろう。

「野田さん!」

・・・・・・へ?

「ああ、いた!」

み・・・・・三矢・・・くん?

「ななな、なんでここにいるの!?

「え? いるかなー、と思つて急いできたんだけど・・・。あ! 店

員さん、俺にもコーヒーください

それだけ言うと彼は私の目の前に座つた。

「そーじゃなくって! 答えになつてない!」

「…………やつきの人達の事?」

「……………つぐ…………そ、そつよ」

「断つてきたんだ」

「は?」

断つてきた?何を?

考えていることと同じことを私は彼に聞いた。

「付き合つてつて言われたんだ」

「…………そだよね。私馬鹿みたい。あの流れじゃ絶対。

「『』いんな馬鹿な俺でもいいの?勉強教えてくれるの?』って聞いたらんだ。

なんか相手も頭悪いらしくてさ『勉強は…………』って口元もつたところを断つたんだ

ふうーん・・・・。

「ね、そんなことどうでもいいからせ、英文教えて欲しいんだけど」と、教科書とノートを取り出した。

いつもと同じじゃない。何だから。

私はクスリと微笑んで「で、どこするの?」と問いつ。

彼はいつもの無邪気な笑顔を向けて「うー、うーー。」と言つた。

そつか。この日常、まだ続くんだ。

と、心のどこかでホッとしている私がいた。

日常（後書き）

もつと長くしたいけど氣力が追いつかねえんだよ
馬鹿野郎――つ 、) 。 。 。 。 。 * : 。

マイクと学校

あの日（三矢君の咎められた日）から数日経った今日。私はある異変に気がついていた。

「…………嘘」

いつもの近場の薬屋さん。そこでマイク道具を買つんだけど「…………『都合により店を閉めさせて頂きました。本日まで誠に有難いございました』…………？」

「…………ビービーしてくれるの！？ 他に近所に化粧品売つてるお店なんてないよ！？」

あわわわわ！す、すっぴんで学校に行けとー！？

と、悶えている恥ずかしい場面を三矢君に見られてしまった。

「どうしたの？」

「…………み、三矢君…………実は…………」

「…………つぶつは！それだけ？野田さん綺麗だし、そのままで行きなよ。ね？」

「…………ぐぬぬぬ…………」

まあ確かに。あの三人にバレたからさうと広まってるし……。

ちなみにバレた日は金曜日。土曜日は学校がなかつたので誰にもあつてない。

そして明日が（魔の）月曜日。

仕方ない。ここは腹をくくるしか…………。

「分かつたよ…………。それで学校行くよ」

「なにそれ、俺悪い」としたみたいな

「…………だねつ」

と私たちは笑つた。

「…………いよっし…………」

私は「ふー」と大きく息を吐いた。

マイクはしてない（してるけど軽い）。髪は整えた。

「学校行つてやる…………」

低い声で眩きバッグを掴む。

「行つてきます！！」

無駄に元気を入れてそういった。

案の定。ほんつとーに予測通り。

私が教室に入つて自分の席にバッグを置くと「嘘！？」や「…………
変わりすぎ～」などと声が聞こえる。

そして最低なタイミングで

「野田さん本当にそれで來たんだー」

つて指さして笑う三矢君…………。笑うな、お前。

「三矢君がこれで来いつていつたんじゃない。」

「そだつけ？」

無 責 任 ！

「もういいよ…………。はあ…………」

私が立ち上がるとき三矢君が

「ど」「行くの？」

もうびーでもこーでしょー？

「お茶買つの・・・。
なんか逃げたかった。」

勿論お茶なんて言い訳だけじね・・・。

マイクと学校（後書き）

なんごうとか

俺の知らんうちに終わっていた最新話・・・何故・・・?

私はいつものように学校に行くため外に出た のだが。

「わわ・・・・」

私の家の前に張り込んでいた様な子が焦りながら逃げ去つっていく場面を見た。

「・・・・・な、何?」

「それはあれだよ! ! !

「あれ?」

学校に着いてから早速友人にそれを話した。

中学からの友人・川谷かわやみえだ。

無論、メイクのことは前々から知っていた。隠してくれていた優しい友人である。

「ストーカーじゃない?」

「ないわー」

私は彼女に即答した。

「ないね」

彼女もそれに即答する。 だよね。

「ま、でも、あんたはさ、元がいいしあるかもよ?」

「ないわー」

「ないね」

そんな時チャイムが鳴った。 みえは他クラスのためいそいそと教室へ戻つていた。

どうやらこの授業は自習らしい。

代理の先生さえ来ないので私たちは自由にやつっていた。

携帯がバイブルーションを始める。みえからだ。

『で、あいつとはどーよ?』

あいつ?

『あいつって誰?』

と返すと間も開けず直ぐ様返ってきた。

『無論アイドルくんだよー』

あ、アイドルくんって……。たしかにちやほやわれ……。つて「どーよ」つて!?

『どういう意味!?』

『もー、恥ずかしがらないでッ 付き合つてね?つて聞いたの!鈍

感ツ

『別にー』

文面では冷静だったけど、内心ありえないぐらい心臓が鳴つていた。

付き合つ、という単語。だつてあつちがそう思つてないかもしないし。

つて、私だつて三矢君のことそんな……。

そういうことを考えていたら授業が終わつた。

そのあと、「変なこと聞いてごめんね」とみえが謝りに來た。

私は「別に」と答えた。

その時、みえはちょっと悲しそうだつたけど私自身どんな顔で答えたかなんて覚えてなかつた。

ストーカー、じゃないよ

最近 三矢君との会話の数が減った。

別に嫌なわけじゃないけど、なんかちょっと寂しいかなって思う
私がいた。

みえには、「喧嘩でもしたの?」と聞かれたけど特に思いつくア
テもないし。

ひとつ言えるとすれば、私がマイクをやめてから、男子に絡まれ
るようになつた。

追いかけ追い回され逃げ続ける日々が続いたせいか、話す機会も減
つた のだらうか?

きい、と切な気に音を立て扉を開ける。

またあの人だ。今日も田代が合つなり、そそくさと逃げよつとする。

「ねえ

思い切つて声をかけた。彼は「は・・・?」と足を止める。素
直だ。

「名前は? 一緒に行こうよ」

「・・・・・ 浅間 淳太ッス」

「浅間・・・・・あ!まさか例の不良君?」

格好は見る限り校則違反のオンパレード。

ワックスで整えた金髪、服やら耳やらにはキラキラ光るアクセサリ
ーが沢山。

そして何と言つても私と同じクラスなのよね。まあ、不登校で会
つてないけど・・・・・。

「いつも学校行かないでどこに行つてるの?」

「・・・・・ゲーセンとか・・・カラオケとか・・・

「そつかあ・・・・・ね!今日は出てみない?ねえ?」

「・・・・・あ、じゃあ・・・その・・・・うつす・・・

「…………うわ…………」

「…………つち、見てんじゃねーよ

「お間君！」

何もしなければいい子なのになあ・・・・・。

「田代君」

「そいつ誰？」

私が「三矢君」と言い終える前に彼はそれを

「俺は誰かつて聞いてんだけど」

「……………」その……………「あ、我聞君！我聞

淳太くんだよ」

どうしたんだろ？いつもと違うよ。なんか、こう、怖いの・・・

「おまえがハカネン岬があの二頭獣に付いてはさすがだな」

・・せりせ

「んだお前……」

何がシカ合つてんの!!? ちょ、やめ……。

誰か助けて！！

「ほおー、おまんこー。」

ばあっしーん、と一人の背中をふつ叩く。

・・・・・みえ！！

「あんたら茜を困らせたら殺すじゃスマネーヴ？」

「すんませーん」

一人は彼女の一言ですんなりと謝る。

みえは私の方へ振り向いて笑顔を向ける。

「うーっす！おはー教室行こうか

「う、うん！」

「なんだよ、なんだよ・・・」

「川谷さん全部取つてくんだもんなー」

淳太と祐介は一人むなしく教室へ向かった。

わゆ・・・・・。
 「　「　「　球技大会イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」！」

「 体育祭の次に嫌な大会名じやない……」

ほほ半田潰して極寒の田にやるところ。ああ！ 嫌だわ！ 豪
鬱よ……

いの通りクラスのみんなはやる氣。やる氣。気が滅入るわ……。
中学生みたいに作戦決めとかしてるし……。当分私の出番はコ……

・
 「野田さんはどうする？」
 来たし。

「ど、どうして？」

「出る？ でない？」

なな、なんつー選択肢！ 出ないとこつ手もある
「いやー 美人で田くらましきよひぜー」選手決「いや待て待て」
ふう、すんごめ成功。

「運動は苦手じゃないけど、どうせ今年もダッヂボールなんでしょう？」

「うん、まあ。なんで？」

「あのボール痛いの」

率直な感想。本当に嫌なの。あれ。

どうしてバレーのボール使うわけ？ 痛いに決まってる。しかも季節
は冬よ……。寒いと痛みも増えるじゃない。

「それだけ？ ね、出てよ

「やなのー」

半ば子供みたいに嫌がる私。他にもいるでしょ、運動できる子。

「うーん、なんでも来週だしまあいつか」

「出ないからね」
補欠でよろしく。

誰？

球技大会当日、私は補欠だつた。
ほぼ元気のいい男子同士で遊んでいるような光景を、微笑ましく見
学していた。

ふと目についた人。

三矢君だ。ちょっと声でも掛け……

そう思った刹那、三矢君は私の知らない女子に声をかけられ笑つ
て話していた。

誰？その人は、誰？不安ばかりが過ぎる。

「の一ださん」

「！」

上から不意に声をかけられる。そのせいで、三矢君への集中は
途絶えた。

声の主は浅間君だった。

「何してんの？」

「別にー？……浅間君レギュラーでしょ？行かなくていいの？」

「あ？ああ、ちょっと休憩貰つてさ」

そう、と八つ当たりっぽく素っ気なく返す。

関係ない人に八つ当たつちゃうなんて情けないよね……。

「野田さん？」

「え？」

ピピー、と頭が痛くなる音。一試合が終わつたんだろう。

「俺行くね、次だし」

「あ、うん、頑張つてね……」

手を振りつつ見送る私。

そ、そうだよー三矢君はど

あれ？ 居なくなっちゃった……。 別に監視してた訳じゃない
し……。

「あーつかね」

「みえ……」

「元気ないわね」。相談だつたらあたしに何でもしなさいな

「ありがと……でも、まだ大丈夫」

「ふーん」

(……あんたの“まだ”っていつなんだろーね。)

一人で抱え込んじゃうのかな。私は、もつとみんなを頼らない
といけないのにね。

体育館を出て少しした廊下。自販機の前では

「ねえ、祐介君」

「んだよ」

「最近一緒にいるあの子誰？」

「別に関係ねーだろ」

「あるわよオ」

にやにや笑う彼女。

そこへ、誰かが走つてくる音がした

あれ？あれつてもしかして、三矢君？

私は無意識のうちに居なくなつた彼を追つていた。そして、ここでやつと見つけた。

つて、あの女人誰……？体操着きてるつてことは同じ学年つて

「」と？

「三矢君！」

「…」

三矢君は私の呼び掛けで、すぐにこっちを向いた。 ちょっと嬉
しいかも。

「あら。 ビンゴ？」

「…………えと、 どなた…………ですか？」

「うふふ」

彼女は不敵な笑みを残しそそぐと逃げてしまった。
一体、誰だったの？

誰？（後書き）

俺も球技大会やだ

勘違いも程々。

たたた、とわつさ三矢と話していた女子がとあるクラスに戻ってきた。

「あ、裕理イ、どこ行つてたん?」

「別にどこも行つてないわ」

「嘘言つうなあ! カレシにでも会いに行つたんじゃないの?」

「そんなんじやないってえ」

恥ずかしそうに笑う。

「次試合だよ。応援よひ

「はあーい」

「の、野田さん?」

「……なに」

「あーあ、そりだよね、三矢君だつて彼女ぐらじ面おんなむうるもん。

「ちよ、怖い……、俺試合だし応援頼むよ」

「はいはい」

「……」

私馬鹿みたい。勝手に好きになつて、や。諦めないとね。

「ふははー振られてやんの、祐介」

「つむせーな…く口むんだよ…」

「はははは

「かくしょー、勝つてやる」

ワアアアア、と歓声。

わらのクラスが勝ったみたいだ。べつに元気でもこーんだがど…。
すると、三矢君が私の方へ寄ってきた。

「……野田さん」

「……」

「……の、野田さん何か勘違いしてない?」
勘違い? どういう意味よ……。

「……や、わらわ一緒に話してたの姉貴なんだ!」

「はあ?」

「あ、いたいたー」

ベストタイミングでその女子が来た。

「もー、祐介ジユース奢る約束でしょ」

「お金あげるから勝手に行つてろ」

「わらわー あ、あなたが茜ちゃん? いつも弟がお世話を…あ
のね、この子つあなたのこ」

「あーねー わー! ?」

「……」

「ブ、クスス。そうだったんだ。なあんだ、結局勘違いじゃない。
「じゃーね。今度メアド交換しょーよ」
そう笑つて走り去つていつた。

「……」めん、先に言わなくて

「わらん、いいの。こっちこそ勘違いなんかしちゃつて」

「やーだ、お詫びのかわり!」…

「?」

耳かして、と皿の彼に従つ。

「……」

「…………んも! 一馬鹿にしないのー。」

三矢君は黙つて逃げるよう走つていった。

『野田さん、好きだよ』

勘違いも程々。 (後書き)

実際諦め悪いのは男だと僕は聞きました。

何度も何度も繰り返されたれる昨日聞いた言葉。

『野田さん、好きだよ』

思い出したびにびにか、奥から熱が湧く。

「……もつと話しひらひじゃない」

「んんーーー？！なんだつてえーー？」

今は昼食中。私はみえと一緒に食事をしていた。

「なんでもないよーだ」

「ふうーん？」

半信半疑な返事をするみえ。

私は外に目を向けた。ここ数日雨が降り続いていたのに何故か晴れていたのだ。

「良かつたー久々にいい天気だね」

「雨降ると寒いしね」

「まあね」

かくゆう私は今日降ると思っていたが傘を持つておらず、雨が降らないことに安心していただのだ。

「今日は早帰りだよ」

と、みえ弁当箱を片付けながらがいう。

「五時間目の授業が終われば帰り。大事な会議があるんだつて」

「邪魔者は帰れってか」

「だね」

私もみえに続き食べ終えたので弁当箱を片付ける。
まだ昼休みの時間はたっぷりある。

「何しようか

「昼食後の校内散歩でもいかが？」とみえ。
私は別にやることもなかつたわけなので、頷かざるを得なかつた。
図書室に行けばよかつたかも。

私たちは中庭を歩きつつ会話をした。

「男子は元気に体育館でバスケかな？」

「じゃないー？見てたらボール飛んできやつ」

「わかるー」

三矢君もやるのかな？……じゃない！

だめだめだめ！……なんでいつも考えが三矢君に……。

「茜？」

「ふわあー？」

あ、えっと、

「みえ……」めん

「別にいいよ……」

偶然近場にあつたベンチに腰掛ける私。

「……三矢君かい？」

「……ち、ち、ち、ち、ち、違うよおお？」

「図星か」

「……ひぐ……」

「テンポ置いて、みえが続けた。

「口クらないの？」

「……」

「告白だなんてそんな……無理だよ」

「なんで？」

「……なんであつて……。

軽く唇を噛んだ。

「嫌われたら、嫌……じゃない……」

「なんで？なんで聞いてもないのにわかるの？」

「あ……。」

「ダメだよ。西は壁かい」

『昔から』。

いつも言われて思い出した記憶。

昔から、いつも、昔から周りに流されてばかりで自分の意思表示を出来ずにいた。

ハキハキキビキビと物事をこなす、みえが心底羨ましかった。こじめられてくる私を助けてくれたり、私の意見を代わりに言つたり。

その度々に言われる言葉。

「だめだよ、茜は」

「ちゃんと言わないで」

そればかりだった。説教じゃないことは分かつてゐる。だけど、それでも。

みえは知らない一つの出来事があるから。

意思の疎通。そんなじく普通で簡単な事は、この一つのじくがあつたから、私に難しいと思わせる。

本当に小さな、小さな思い出のかけらの一つで、消えぢやこいそうな馬鹿つぽい記憶。

それは、小学校の時のことだった。

私だけ、意思を示すことを諦めているわけじゃない。ちゃんと、向き合いたいと思っているんだ。

そのきっかけとなるときが来た。

気になる人が出来たのだ。このことは、みえにさえ伝えてない。みんなに分け隔てなく優しい人で、笑顔も絶やさず人気もの…クラスの中心的存在だった。

…あまりにも、こんな根暗な私には遠すぎて大きすぎる存在。

終業式も終わり、皆が解散する頃。

次の学年へ上がればクラス替えがある。一度と機会はないかもしない。

私は意を決して、彼に告白をしたんだ。

…彼、なんて言ったと思つ?

「お前みたいな顔だけの女子と、釣り合つわけないだろ」

つて、言つたんだよ。勿論大当たりだった。釣り合つわけない。

振られる決心もついてたけど、だけど、それでもその言葉は深く重く突き刺さつた。

それから、彼とは同じクラスになれたけど、会話なんてもつての外。近付くことさえ避けられた。

そのせいか、私は一時期家に引きこもりがちだった。

学校なんて、友達なんて。会話なんて。

意思表示なんて。

みえは知らない。私しか知らない孤独の意思の記憶。
思い出したくなんてなかつた。

このことがあつたから、もう恋なんてしない。顔も嫌い、そう、
決めたはずなのに。

昔に（後書き）

諦めんなよ……

応援してる人たちのこと思つてみるよ…！？

お前昔を思いだす

松岡さん好きです、エンナ…もとい本編クラッシャー音無です。

みんな、勿論冬は松岡で乗り切るんだよな！？

「…………ね 茜！？」

「！」

みえに呼ばれ我に帰る。横田で見渡すと、教室。

「なあにぼーっとしてんの？あたし教室帰るね？」

「あ、うん」

そつけない返事。嫌な思い出を、思い出しちまつた。記憶の、深くに沈めたハズの記憶を。

あの頃に比べれば、意思の疎通なんてあの頃じゃ想像できないくらい簡単になつた。

親しめる親友。クラス。それは全て三矢君のおかげだと思つた。

「……」

チャイムが鳴つた。五時間目が始まる。

雨足は、五時間目の中盤からひどくなつた。

授業中、型破りなみえからメール。

『あたし車で帰るね』とだけの、珍しく絵文字も何もないうつかけない文。

雨と、文が、私を不安へと追い込んだ。

「はい、HR終わり。雨もひどいし気を付けて帰るよ！」
大雑把なHR。強まる雨音。勿論、傘はない。

「あちやー……」

生徒玄関でみんなが帰つたあと、一人寂しく佇む私。

雨のノイズが気持ち悪いぐらい寂しくなる。

一人と言えば、最近はだいたい私と一緒に居てくれた人がいた。
みえだつたり、浅間君だつたり、三矢君だつたり。

久々の一人か。なんか、さみしいな。

飛んでくる水しぶきが寒い。意を決して雨の中に飛び込むか?
だけど、そんな時。

「野田さん」

雨の音にかき潰されない。よく聞こえる声。

「……三矢君」

声の方へは向けなかつた。

「どうしたの? 一人で」

「別にいいでしょ……」

「そう? ね、一緒に帰ろうよ」

俺傘あるんだよ、と言ひ。きつと笑つていて。
素直に頷けない。よぎる告白。私があなたと一緒にいていいのか、
そんな不安と共に。

「……いい」

「いい? どつちの?」

「……一緒に帰らなくて、いい。先に帰つて」

突き放し氣味に、強がり氣味に言つた言葉は微かに震えていた気がした。

「……」

告白だからつて、少しごらり可愛いからつて、調子に乗つてゐる私も悪い。

頭を冷やさないといけないの。離れないといけないの。

そんなマイナス思考になつてたら、自然と涙が出そつになつた。

「野田さん」

「……」

「野田さん」

「…………

「嘘」

…………シ――名前で呼ばれるだなんて……
「うひむ向いて、ちやんと、俺の顔見てよ」

後書號（識別碼）

() , , ()

偽装メイクをするのをやめた野田さんは、異常なぐらいに可愛く。だけどその裏返しに、異常なまでに絡まれて。助けに行きたい俺もいるけど、でも、彼女にとつて俺はただの友達。顔がいいだけの、残念くんだから。

みんなと野田さんが仲良くなつてこくに連れて、俺と野田さんの勉強で取り持つた関係は、崩れつつあった。毎日通つてた喫茶店も、一週間に一度と減つた。無論、彼女と喋る回数さえも。

そんな時、俺が姉貴と話していたとき彼女と勘違いした野田さん。嫉妬だったのか、単に気になつたのか、ビックリもいいけどすげえ嬉しくて。

俺が、彼女を好きだと今更実感して。

勘違いと知つた彼女の笑顔が、無駄に綺麗だったからすげえじめたくなつた。

からかいつもりで言つた『好き』は本当の気持ちだったのかもしない。

* * *

玄関で見た、野田さん。

いつもの笑顔で居るんじやなくて、泣き出しそうな寂しそうな顔。雨が怖くて震えている子供みたいな顔。

「野田さん」

と、俺は声をかけた。

雨にかき消されぬよつと。よく聞へよつこと。

「……三矢…君」

そう答えるだけで、じつの方へは見てくれなかつた。

気になつて、問う。

「どうしたの？ 一人で」

だけど、答えは素つ氣なくて。

「…別にいいでしょ…」と。

「そう？ ね、一緒に帰ろうよ。俺傘あるんだよ」と笑つてみせた。

だいぶ長い沈黙があつて、返つてきた返事。

「……………いい」

「いい？ どつちの？」

「……一緒に帰らなくて、いい。先に帰つて」いつもと違う、突き放すようなきつい声で言つ。そして再び、長い沈黙。

俺は耐えきれず、彼女の名前を呼んだ。

「野田さん」

「…………」

「野田さん」

「…………」

返事は返つてくるはずもなく。

焦らされた俺はついに

「茜」

と呼んだ。

「じつち向いて、ちゃんと、俺の顔見てよ」泣きたくなる。切実な言葉。

だけどはつかりと俺は彼女に言つた。

キライ、スキ

そつちに振り向ナるわナない。

私は、人を好きになっちゃダメ……ならないって決めたはすでしょ、ぎゅ、と唇を噛んだ。

「あれ、本気だからね」

「俺、野田さんのことマジで好き」

「え、だからいつも向いてって

「嫌」

それだけ聞くと三矢君は黙り込めた。
雨の音が少しづづ響いていた。

喫茶店行こう

「…今田はお腹痛いからだめ」

「家に歸る？」

「そつか
じゃあ、俺帰るね」

やめてよ。わがままな女だって、怒つてよ。

留めていた涙が溢れてきた。

立つてさえ居られず、座り込む

うら、俺のこととも

卷之三

今まで“嫌い”ばかり意思疎通してた。

目立つことが“嫌い”。球技大会“嫌い”。だけど、今なら、

「私、
私ね

三矢君のこと、好きなの……っ」

言える気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574w/>

君と私の秘密。

2011年12月29日20時51分発行